

1 主題

生きることの喜び 3-(3)

2 ねらい

内面的な良心に従い行動することで、人としての信頼関係を築こうとする道徳的心情を養う。

3 資料名

「人間関係信頼残高」（自作教材）

4 主題設定の理由

3-(3)「人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きる喜びを見いだすように努める。」

ありのままの人間は、決して完全なものではない。人間は、総体として弱さをもっているが、それを乗り越え次に向かって行くところに素晴らしさがある。ときとして様々な誘惑に負け、易きに流れることもあるが、だれもがもつ良心によって悩み、苦しみ、良心の責めと戦いながら、呵責に耐えきれない自分の存在を深く意識するようになる。そして、人間として生きることへの喜びや人間の行為の美しさに気付いたとき、人間は強く、また、気高い存在になりうるのである。また、ここで言う人間としての生きる喜びとは、自己満足ではなく、人からほめられたり、認められたりするという喜び、人間としての誇りや深い人間愛、崇高な人生を目指し、同じ人間として共に生きていくことへの深い喜びである。

中学生の時期は、人間が内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せてもっていることを理解することができるようになってくる。しかし、なかなか自分に自信がもてないだけに、劣等感にさいなまれたり、人をねたみ、恨み、うらやましく思ったりすることもある。また、一方では、崇高な人生を送りたいという人間のもつ気高さを追い求める心もある。したがって、自分を含め、人はだれでも人間らしいよさをもっていることを認めるとともに、決して人間に絶望することなく、だれに対してもその人間としてのよさを見いだしていく態度を育てることが大切である。

指導に当たっては、まず自分だけが弱いのではないということ、人間がもつ強さや気高さを十分に理解できるようにすることが大切である。また、いたずらに、弱さや醜さだけを強調したり、弱い自分と気高さの対比に終わったりすることなく、自分を奮い立たせることで目指す生き方、誇りある生き方に近付けるということに目を向けられるようにすることが大切である。このような指導を通して、内なる自分に恥じない、誇りある生き方、夢や希望など喜びのある生き方を見いだすことにつながる。

【中学校学習指導要領解説 道徳編】

(1) ねらいとする道徳的価値

指導内容3-(3)では、「人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める」ことをねらいとしている。中学生の時期は、内に弱さや醜さをもつと同時に、強さや気高さを併せもつことを理解することができるようになってくる。しかし、自分になかなか自信がもてないために、劣等感にさいなまれたり、人をねたんだり、恨んだり、うらやましく思ったりすることもある。また、一方で、崇高な人生を送りたいという人間のもつ気高さを追い求める心もある。よって、人は自分も含めて、いろいろなよさをもっていることを認めるとともに、絶望ではなく、誰に対してでもその人のよさを見いだしていく態度を育てることが大切になる。

3-(3)の指導においては、普通の学校生活の中で他人の悪いところではなく、良いところをたくさん見付けていくように指導している。人はどうしても相手の良いところよりも悪いところを見てしまい、批判しがちである。人の良いところをたくさん見付けることで望ましい人間関係を築いていくことの大切さに気付かせ、考えを深めさせていきたい。

(2) 子どもの実態

素直な集団であるが、女子が多い学年ということもあり、男子がなかなか表舞台に出てきて活躍できないことが日常生活において多く見受けられる。グループ学習においてもなかなか自分の意見を周りに発信できないでいる子どもたちである。2学年となり、「認め合い、励まし合う仲間づくり」という学年目標を掲げ、学年団の教師が常にこの目標を子どもたちと共有し、温かい人間関係づくりに努めてきた。クラス替えをして半年の段階ではあるが、徐々にお互いを認め合い、意見を出し合ったり交流の幅が広がってきたと感じている。

しかし、この学年の課題としてまだまだ「この人はこういう人だ」と決めつけてしまっていたり、「自分は周りから信頼されていない、認められていない」となかなか学級・学年での自分の居場所を見付けることができない子どもがいることも確かである。

そこで本時では、信頼すること、されることの大切さを知り、信頼される人になるためにはどうしたらよいかを考え、日頃の自分自身を見つめ直し、信頼される言動を心掛けようとする心情を養うきっかけにしたいと考える。

3) 資料について

自分自身が周りから信頼されているかどうかを表すものを「人間関係信頼残高」とする。これは、人間関係における信頼のレベルを銀行口座のような形で表したものである。親子、友だち、先生など自分と関わりのある相手に対して良い行いをすれば「預け入れ」となり、信頼を失うような言動を取ると「引き出し」となる。その残高で、人との信頼関係を考えることができる。また、本時では、「信頼」について考える手掛かりとして2010年のサッカーワールドカップでの映像も活用する。

5 研究内容との関わり

(1) 研究内容1 自己との対話

○ 求める子ども像

ねらいとする道徳的価値について自分の考えを自由にもてる子ども

他者の多様な考えに触れ、自分の思いや考えを明確にもてる子ども

自己との対話を深めるために、導入の段階において、子どもたち一人一人が、実際に信頼グラフを作成することで、ねらいとする道徳的価値に対して、より具体的なイメージをもつことができると考える。このグラフを活用しながら、自分が信頼を得るためにはどうしたらよいかを考えるための手掛かりとさせたい。

また、終末の場面で、日常生活を交流させることで、日頃の自分の行動を前向きに捉えさせたい。

○ 指導の工夫

- ワークシートを用意し、自分の考えをじっくりと吟味できるようにする。
(書く活動の工夫)
- 信頼グラフを実際に作成することで、今までの自分について振り返らせる。
(意思表示の工夫)

(2) 研究内容2 他者との対話

○ 求める子ども像

自分の考えを素直に伝え、他者の意見を共感的に聞くことのできる子ども

より多くの意見を出しやすくする雰囲気をつくるために、学級内の男女の人数差を考慮しながらグループ編成を行い、お互いが自由に自分の考えを伝えることができるようにしたい。また、授業展開においては、それぞれの段階で子どもたちが理解しやすい端的な発問をすることで、常にねらいとする道徳的価値（信頼）を意識しながら考えをもち、発表することができるように考える。

○ 指導の工夫

- グループの編成を工夫することで、子どもたちが自分の思いを主体的に伝える雰囲気をつくるように心掛ける。(話し合う形態の工夫)

6 本時の展開

(1) 本時のねらい

内面的な良心に従い行動することで、人としての信頼関係を築こうとする道徳的心情を養う。

(2) 学習指導過程

指導過程	学習活動と主な発問	指導上の留意点(●) 評価(■)
導入	<p>人間関係で大切なことについて考える。</p> <p>○ 人間関係で重要だと思うことは何ですか。</p> <p>○ 今の自分の信頼度をグラフに表してください。</p>	<p>● ワークシートへ記入させる。</p> <p>● 信頼グラフを作成し、交流させる。</p>
展開(前半)	<p>資料を基に「信頼」について考える。</p> <p>○ 駒野選手がPKを外したときのチームメイトとそれを見ていた国民の気持ちを考えてみましょう。</p> <p>○ PKを外した駒野選手は、その後どうなったと思いますか。</p> <p>「信頼」とはどのようなことなのかを深く考える。</p> <p>◎ 駒野選手が周りから励まされたのはどうしてなのか考えましょう。</p>	<p>● 映像資料を見せる。</p> <p>● 「国民の気持ち」と「チームメイトの気持ち」をグループごとに考えさせる。</p> <p>● 班での話し合いをさせる。</p> <p>● 信頼残高についての説明をする。</p>
展開(後半)	<p>「信頼」を高める方法について、自分のこととして捉える。</p> <p>○ 自分の信頼残高を増やすためにはどうしたら良いでしょうか。具体的なことを付箋に一つ書いてください。</p>	<p>● 付箋に記入し黒板へ貼り付けることを指示する。</p>
終末	<p>「信頼」という視点で友だちのよさを交流する。</p> <p>○ クラスメイトの良かったところについて発表しましょう。</p>	<p>● これまでの経験をもとに良かったところを交流する。</p> <p>■ 信頼を高めるためにこれからどのようにしていくと良いかを考え記述している。</p>

◎中心発問：ねらいとする道徳的価値の自覚を深めるための発問

8 研究内容に関わる本時の検証

(1) 研究内容1 自己との対話

ねらいとする道徳的価値について自分の考えを自由にもてる子ども

他者の多様な考えに触れ、自分の思いや考えを明確にもてる子ども

最初に信頼グラフを使い、今までの自分の生活における信頼について自己との対話を行うことで、ねらいとする道徳的価値について考えを明確にすることができた。

展開後半での自分の信頼残高を増やすためにできること（自分の今の弱点を探す）を付箋に書くことや、付箋の中に書いたことが資料のどの項目に当たるのかを考えること、他者の考えと自分の考えを比較する中で、再び自分の考えを見つめることなど自己との対話の場面を有意義に設定することができた。

今回の授業では、他者との対話を活発にすることを重点に置いたので、最初からグループ形態にした。結果として子どもたちは、多様な考えを積極的に発表できた反面、個別で考えを深める場面では、周りの意見に左右される姿が見受けられた。このことから、個別の形態とグループの形態を使い分けることで、さらに子どもたちの考えを深めたり、多様な考えを引き出したりすることができたのではないかと考える。

(2) 研究内容2 他者との対話

自分の考えを素直に伝え、他者の意見を共感的に聞くことのできる子ども

班編制を工夫したことで、他者との話合いが活発に行われた。男女の人数に差（男子12名、女子20名）があるためにふだんの班編制では、男子が1名の班など話合いが進みにくいこともあり、男女別の班で行うことにした。バランスの面で問題もあると考えたが、子どもたちの道徳的価値に対する多様な考えを引き出し、共感的に交流することができた。理想は、ふだんの学級での班でグループ活動が進められることだと思うので、そこはこれからの課題である。

他者との対話がグループや全体の場で活発に行われた反面、どうしても他人の意見に任せたり、良い意見を考えていても少数意見である場合に発表ができなかったりする場面が見受けられた。